

民主主義の砦 - 私にとっての労働組合

(自己紹介にかえて)

佐々木 享

私は、早くに父を亡くしたうえ家が貧しかったので、大学は夜学で、昼間は働いていた。工業高校機械科を卒業してすぐに勤めたちっぽけな会社では、機械設計をした。自分が構想し、ひいた図面どおりの機械ができるのだから、仕事は面白かった。しかし大学で専攻したのは工業化学だったので、工業化学を勉強しようという学生がいつまでも機械設計をしていても仕方あるまいと、大学の小坂勇次郎先生（のちに東洋曹達の重役とられた）が心配して下さり、通産省の外局である工業技術院傘下の東京工業試験所という研究所の助手の口を紹介して下さった。助手といっても大学のそれのような立派なものではなく、身分は雇で、仕事の内容は実験の手伝いであった。大学を卒業するまでの3年9カ月程働いたこの工業試験所の時代には、上司や友人に恵まれて、研究の面白さや厳しさを初めて学んだ。いまから40年も前の1952年7月から1956年3月までのことである。敗戦（1945年）後まだ間もない時期であった。直属上司の浜島という研究員（のち宇都宮大学教授）はひじょうに親切な人で、何も知らない私のような者に、実験装置や文献調査をふくむ研究の方法をなにくれと指導してくれた。しかし、この面でのことは別の機会にゆずる。

労働組合とその活動を初めて学んだのも、この時期の大きな収穫であった。研究所とはいつでも役所のことだから、入職の際の学歴、通過した採用試験の種別などによる身分差別は厳しかった。ここの労働組合は、部課長と庶務課で人事を扱う掛長をのぞくほぼ全員が加入していた。研究員の大半は旧制大学出の人々であった。他方、雇の助手は大てい高卒で、同じく雇である下級の事務職員などとともに、職員の最下層を形成していた。

この職場の労働組合（正式名称は、全商工労働組合関東信越支部東京工業試験所分会）は、旧制大学出の研究員から雇の助手や事務員にいたるすべての階層を組織していた。組合活動はたいへん民主的であったようにおもわれた。敗戦直後まだ間もない時期であったからなのか、研究所という比較的自由的な雰囲気があったからなのか、あるいは中島篤之助氏（のち中央大学教授）のような有能な組織者がいたからなのか、当時の私にはわからなかったが、おそらくここにあげた事情のすべてがあったのであろう。

初めのうちは、一組合員として組合活動におずおず参加していたに過ぎない。各種のリクレーションや学習会に参加することが楽しかっただけのことである。私の社会科学についての素地は、この東工試における有志の学習会に参加するなかでつちかわれた。そのうちに青年婦人部の委員に選ばれ、さいごには関東信越支部の青婦部長にさせられた。こんなことになったのは、一つには、ここの労働組合が職階上の下層の人たちを大事にしてくれたからであり、職場で最も不利益をこうむりそうな人たちを守ることにその組合が存在する値打ちがある、という考えが歴代の幹部の間に染み透っており、私たちのような若い者に比較的自由的な活動の場を保障してくれていたからではないかとおもわれる。国家公務

員法や人事院規則にしばられている役所のことであるから労働組合といっても何程のことが出来るわけでもない。しかし、自由な雰囲気にも恵まれたことは私たちに幸いした。もう一つ、職場の青婦部の委員をしたときに若い友人と親しくすることができたという事情をあげなくてはならない。私がこの職場に働いたのは、4年弱に過ぎない。他の仲間にはその後定年（60歳）までこの職場に働き続けた人が多いのに、この時に一緒に組合活動をした何人かの友人とはいまでも親しく、今年（1996年）の2月にも、一夜歓談した。

こまかいことを省略せざるをえないけれども、研究の社会的役割というような問題を考える必要があることも、研究者の多い東工試の労働組合活動は教えてくれた。

東工試の労組は、助手層や事務職員をも組織していたとはいえ、数からいっても構成員の主要部分は研究者で占められていたし、委員長はじめいわゆる3役には研究者がなることが多かった。組合役員になっても、研究者は研究者としてしっかりした仕事をしていないと、仲間である組合員からあまり信用されないらしい雰囲気があることをも学んだ。このことは、後に、私自身が組合役員に選ばれたりするときの、研究を大切にしないといけないという大きなましめとなった。

住み心地よい職場ではあったけれども、役所のことだから、技官に任官しなくては一人前の研究者として扱ってはもらえない。大学3年の時に国家公務員5級職（短大卒程度）の採用試験を受け合格したけれども採用してもらえなかった。採用してくれないのなら受けても仕方がないとおもい、大学卒業時には化学の研究者になるのをあきらめ、別の道を歩むことにした。

大学（工学部）を卒業した後、私はぜいたくな位に優れた先生、友人に恵まれた。長谷川淳先生（のち名大教授）は、技術教育という事実上未開の分野について研究の手ほどきをして下さった。この面での話は主題からそれるので省略する。私はまた、塩田庄兵衛先生（東京都立大学教授、のち立命館大学教授）の講筵に列する機会にも恵まれた。近代社会では、労働組合も政党もともに大事だが、両者は目的も組織原理も全く違うのだから混同してはいけないし、癒着してもいけない。無原則な癒着は両者を不幸にするというようなことを、塩田教授から学んだ。

途中経過を省略するが、東工試を退職してから愛大短期大学部に赴任するまでの間に、私は4つの職場を転々とした。そのどの職場でも労働組合が組織されている幸運に恵まれた。そのすべてが政党との関係をすっきりさせていたわけではなかったし、また法規にしばられる制約の多い職場が大部分であったけれども、どの労働組合も学習、討論を大事にしたし、不利益をこうむりそうな人をおろそかにしない組合であった。その意味では、労働組合は民主主義の砦だという思いを深くした。この間の長い人生のあいだには、何回か組合の役員に選ばれたこともある。専従者ではなかったから重荷になることは多かったけれども、そのつど気持ちのよい友人に恵まれたことは有難かった。

特任という特別な身分の者をも温かく迎えてくれた愛大職組に感謝し、愛大の職組も民主主義の砦であって欲しいと願って筆をおく。くりごとを読んで下さった方に感謝する。